

大（応）神塚古墳（寒川町No.8 遺跡）保存目的のための調査概要

遺跡の名称	大（応）神塚（寒川町 No. 8 遺跡）
調査実施日	令和 2 年 2 月 25 日（火）～3 月 30 日（月）（内 11 日間）
所在地	高座郡寒川町岡田 2385
調査機関	寒川町教育委員会 教育総務課
調査担当	小林秀満
調査面積	約 12 m ²
調査原因	保存目的
発見遺構	弥生時代中期：竪穴住居 古墳時代：古墳後円部墳丘、焼土混入土坑 中世：配石遺構、土坑 近世：溝状遺構
出土遺物	弥生土器片、土師器、須恵器、常滑、宋銭

調査成果

大（応）神塚古墳は、寒川町指定重要文化財第 19 号であり、町内唯一の墳丘を保った古墳である。明治 41 年（1908）、東京帝国大学の坪井正五郎氏を中心とした発掘調査が実施された他は、昭和 57 年に神奈川県教育委員会において測量調査を実施したのみである。これらの調査から、前方後円墳であり、5 世紀ごろの造築であろうとされている。

しかし、明治期の調査であり、遺物の出土状況、古墳の範囲や周溝の有無、構築の年代や方法など不明な点が多いのが現状である。

今回、古墳の形態や、範囲、構築年代などの古墳の性格を把握し、今後の保存方法検討のための基礎資料とするための調査を実施した。

本年度は、前方部と後円部の変換部分のくびれ部分の確認を目的として調査を実施した。

後円部の南北軸と東西軸の間、南東方向に墳丘裾部から墳頂に幅 2m 長さ 6m、約 12 m²でトレンチを設定した。また、墳丘に沿って南側を 1m 幅でサブトレンチを設定し、墳丘の築造状況を確認した。

以下今回の調査で確認された事項を述べる。

近世

墳丘の裾に近い部分で溝状遺構が確認された。南北方向に延び、溝内には宝永スコリア純層が混入されており、平成 29 年度に確認された溝状遺構と同じような様相ではあるが、平成 29 年度に確認されたものには底面に配石が確認されていたが、今回の溝では確認されなかった。

中世

墳丘中段、調査区では中ほどから西端にかけて配石遺構が確認された。古墳墳丘の傾斜にそって配石されているように思われる。形状は円形の一部とも感じられるが、トレンチ内だけでは判断は難しい。配石同面からは常滑片、宋銭が確認された。常滑は13世紀ごろと思われ、すくなくともその時期までは活用されていたと思われる。明治期の調査では墳頂部より12世紀と思われる和鏡が2面確認され経塚の可能性も示唆されており、経塚の可能性もあると思われる。

また、墳丘裾、近世溝状遺構下に土坑が確認された。人為的に埋め戻したような堆積であった。近世溝下に確認されたということで中世としたが、遺物等は確認されていない。

古墳時代

大(応)神塚古墳の後円部、前方部に近い部分の裾から墳丘中段までの墳丘が確認された。墳丘裾部分についてはローム漸移層近くまで掘りこまれており、墳丘の傾斜のはじまりは富士黒色土層を削ることで形成された様相が確認された。その上には発泡スコリアを伴う黒褐色土がかなり締まりのある状態で確認されており、この黒褐色土によって墳丘が形成されていると思われる。この黒褐色土層は自然に形成された層としては厚く、締まりもあるため、人為的に墳丘を形成するために用いられた盛土と思われる。

墳丘裾は墳丘部分にくらべフラットになっているが、墳丘部分に明確な傾斜の差が感じられず、周溝となるか判断は難しい。

今回の調査部分は形状から当初の目的であるくびれ部より後円部側と思われた。

遺物は、土師器を中心に、弥生土器等確認された。土器片が多く年代を推定できるような遺物は確認されなかった。

またサブトレンチ内から、黒褐色土から富士黒色土層にかけて掘りこまれている焼土混入土坑が確認された。黒褐色土層が盛土であれば古墳作成途中で土坑を形成し、火を使用したと思われる。

弥生時代

墳丘裾部に弥生時代の竪穴住居の一部が確認された。墳丘形成のため他の部分と同じく削られている状況であった。サブトレンチ内から住居に伴う溝が確認され、住居の壁溝と思われた。硬化面等は確認されていない。住居底面から土器がまとまって確認された。おそらく壺と思われ、紋様から中期宮ノ台期のものと思われた。

まとめ

今回の調査目的である、古墳のくびれ部については、把握することができなかった。また、くびれ部分には土器等が確認されることが多いということであったが、土器に関しても土器片が多く、古墳の年代を想定できるような遺物は確認されなかった。

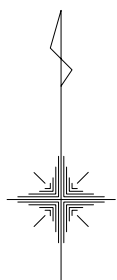
今後調査方法等協議しながらくびれ部分について確認を実施したいと思う。

墳丘の築造状況については墳丘断割を実施したため把握することができた。裾部は削り出し、その後黒褐色土層を盛土とし墳丘を形成した状況が確認された。黒褐色土層で確認された焼土混入土坑の性格については

今後の課題である。

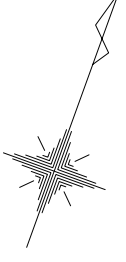
中世の配石遺構については、大（応）神塚古墳がそれ以降の時代にも利用されていた状況をよく表している。確認された部分は一部分であり、全体ではかなり大きな遺構になると思われ、経塚の可能性も考えられるだろう。

しかし、近世や中世の配石遺構により古墳自体の把握が困難になる状況があり、今後調査の方法を考える必要があるだろう。

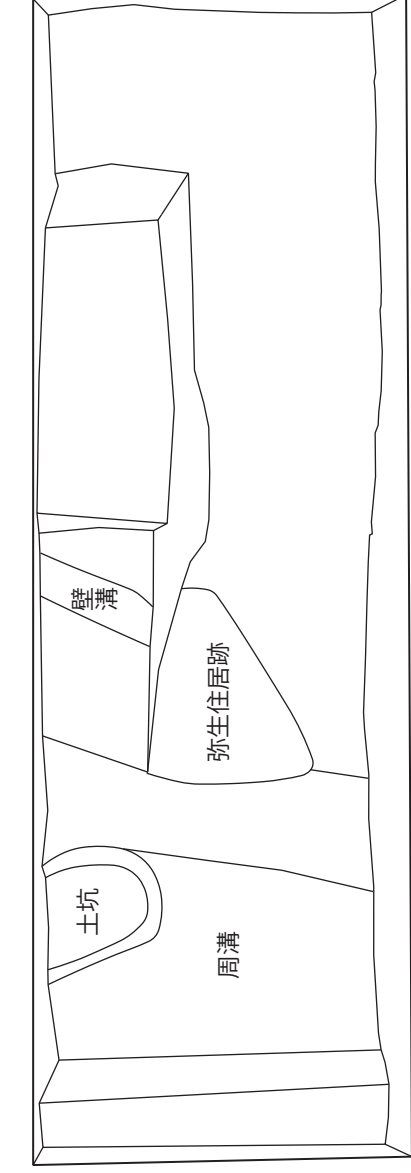


TR1

平成 31 年度 TR 1 平面図 S=1/40

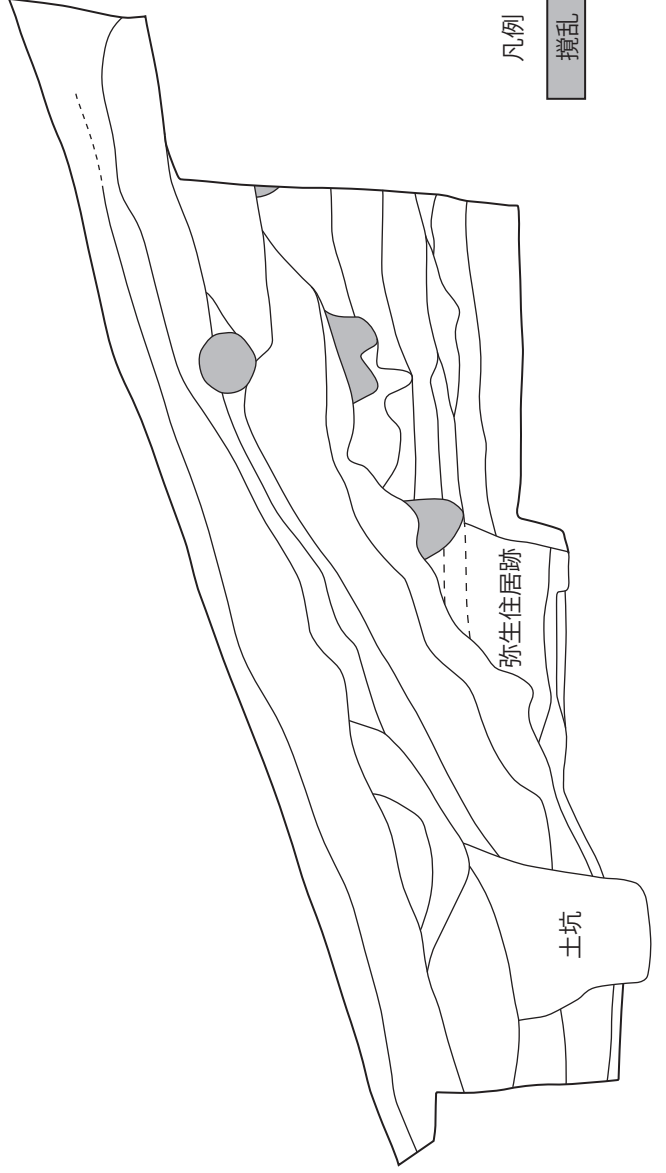


SP.A'



SP.A

平成 31 年度 TR 1 西壁土層断面図 S=1/40



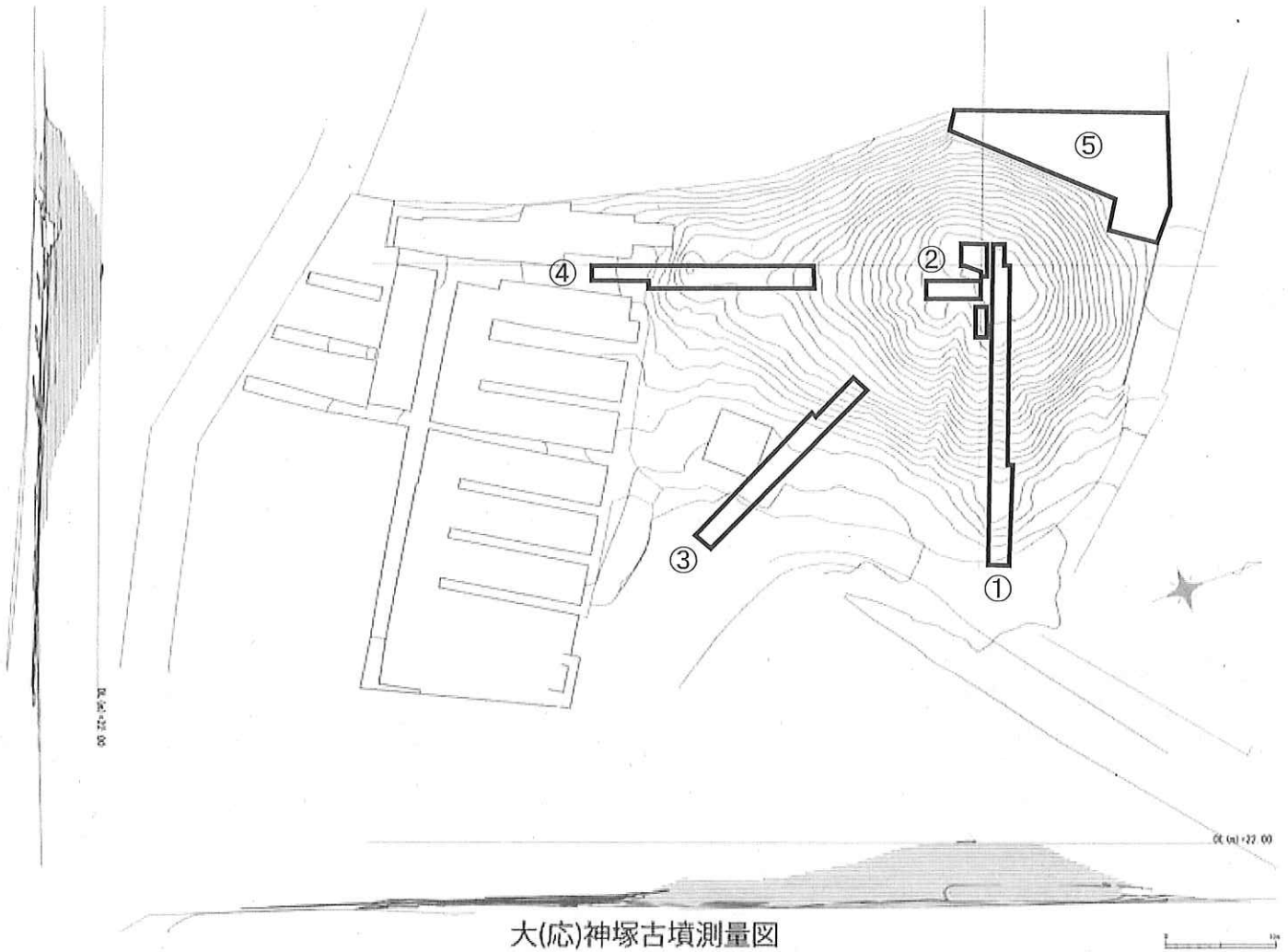
SP.A 17.5m

SP.A' 17.5m

凡例

攪乱

大(応)神塚調査予定箇所



大(応)神塚古墳測量図

- ①平成 29 年度
- ②平成 30 年度
- ③令和元年度
- ④令和 2 年度
- ⑤令和 3 年度

* 調査指導者の助言等により変更の可能性有